

# A・MUSEUM

vol.72  
[2012.9.15]



ミュージアムパーク  
茨城県自然博物館



実をつけた筑波山のブナ

(写真提供：NPO法人 つくば環境フォーラム)

## 筑波山のブナの実

筑波山の山頂付近には日本の山地を代表する自然林である「ブナ林」が広がっています。ブナ林には、ブナをはじめ多くの種類の落葉広葉樹があり、新緑や紅葉、四季折々に咲き誇る植物たちが、筑波山を訪れる人々の目を楽しませてくれます。

秋になると、ブナは粗い突起のある殻あに包まれた実かをつけます。殻の中にはソバの実を大きくしたような三角形の実が2個入っています。ブナがたくさんの実をつけるのは基本的に1年おきで、また5年から7年ごとに大豊作を迎えるといわれています。山全体のブナがこの周期を同調させるしくみは本当に不思議な現象です。また、ブナの実は、ネズミ類やリス、クマなど野生動物の大切な食料となっています（筑波山にはクマはいない）。

今年は、筑波山ではブナの成り年のようです。秋にはたくさん実っていること  
でしょう。  
(企画課 小幡和男)



熟したブナの実  
(写真提供：NPO法人 つくば環境フォーラム)

# 中川志郎名誉館長を悼む

当館名誉館長であり初代館長の中川志郎氏が、2012年7月16日死去されました。中川氏は、博物館建設準備室時代の1992年から2005年まで13年間にわたって当館の運営に携わり、市民と共に歩む今までにない新しいタイプの博物館づくりに大きな力を注がれました。私たち職員一同は、中川氏の遺志を引き継ぎ、当館のさらなる発展に少しでも貢献できるように努力していく所存です。ここに当館における中川氏の経歴を掲載し、謹んで御冥福をお祈りいたします。

## 当館における中川志郎氏の経歴と主な出来事

- ・1992年 6月 1日 茨城県教育委員会参与就任
- ・1994年 4月 1日 ミュージアムパーク茨城県自然博物館長就任
- ・1994年11月12日 博物館開館記念式典挙行、常陸宮同妃両殿下お成り
- ・ 同月13日 博物館グランドオープン
- ・1995年 3月18日 博物館友の会設立
- ・1995年10月23日 皇太子同妃両殿下行啓
- ・1996年 4月20日 高円宮同妃両殿下お成り
- ・ 同月27日 入館者100万人達成
- ・1997年 8月21日 内蒙古自治区博物館と姉妹館締結
- ・1998年 5月12日 ロサンゼルス郡立自然史博物館と姉妹館締結
- ・1998年 6月20日 財団法人日本動物愛護協会理事長就任（2012年まで）
- ・1998年10月14日 当館が公共建築百選に選ばれる
- ・2000年 1月22日 開館5周年記念式典挙行
- ・ 同日 特別企画展「サーベルタイガーとミュージアムパーク開館5周年のあゆみ」開催
- ・2000年12月12日 天皇皇后両陛下下行幸啓
- ・2001年10月22日 財団法人日本博物館協会会長就任（2006年まで）
- ・2002年 4月11日 秋篠宮同妃両殿下お成り
- ・2004年11月13日 開館10周年記念式典挙行、常陸宮同妃両殿下お成り
- ・ 同月14日 環太平洋博物館国際シンポジウム開催、いばらき宣言発表
- ・2005年 3月31日 茨城県自然博物館進化基本計画本文発表
- ・2005年 4月24日 入館者500万人達成
- ・2005年 6月 1日 ミュージアムパーク茨城県自然博物館名誉館長就任
- ・2009年11月13日 茨城県特別功労者表彰受賞



内蒙古自治区博物館と姉妹館締結

(1997.8.21)

## 主な兼職等

- ・独立行政法人国立科学博物館評議員
- ・文部科学省独立行政法人評価委員
- ・中央環境審議会委員
- ・野生生物保護対策検討会委員
- ・トキ保護増殖方策検討会委員
- ・ツシマヤマネコ保護増殖分科会委員・座長
- ・環境資料タイムカプセル化事業検討会・絶滅危惧種部会委員・座長
- ・財団法人いばらき文化振興財団理事
- ・WWFジャパン理事

## 主な著書

- 「動物園学ことはじめ」 玉川大学出版部
- 「動物達の昭和史」 太陽企画出版社
- 「動物と私の交響曲」 東京新聞出版局
- 「スージーの贈りもの」 海竜社

他多数



開館10周年記念式典

(2004.11.13)

## ◆ Nakagawa's MEMO ◆

綿抜 剛 建設準備室長 (1992~1994)  
副館長 (1994~1995)

中川館長からの指示は、パンダマークの入ったメモ用紙「Nakagawa's MEMO」で伝えられてきます。館の運営や活動の基本方針、ボランティアや友の会の組織など、開館までに準備しなければならないすべてがこのメモにありました。館の礎のほとんどが館長の強いリーダーシップの下で決められていきました。私たち職員は議論を重ねながら、館長の熱い想いを直に感じることで、博物館職員としての自覚を深めていきました。開館直前に採用された展示解説員も短期間の研修で急速な成長を遂げ、その大変身ぶりには館長も驚嘆するほどでした。開館に向けて、全員が一丸となり、まさに「チーム中川」で準備を進めていったのです。

館長が掲げる目標の一つに、地域の方々に「マイ・ミュージアム」と呼んでいただき、支えてもらえるような博物館をつくるということがありました。開館一週間前に、近隣の皆さんが自主的に周辺の環境整備をしていただいたことも大変うれしかった思い出です。

開館前、連日夜遅くまで業務が続く中、時には夜食を食べながら、館長から動物園時代の動物とのふれあいの話を聞かせてもらいました。それが実に楽しいひとときであったことを思い出します。そんな中川館長の優しさあふれる姿を今も忘れることができません。御冥福を心からお祈り申し上げます。



県立子ども病院での移動博物館

(1996.7.2)

## 開館10周年に放った3つの輝き

押野 浩 副館長 (2001~2004)

私は、平成13年度から16年度までの4年間、中川館長の下で副館長として勤務しました。その中でも、平成16年度は開館10周年に当たり特別な年でした。

10周年となりますと、記念式典を開催しそれで終了するのが一般的かと思いますが、中川館長は違いました。「開館10周年記念式典」の翌日に、海外から招いた姉妹博物館の館長さん達による「環太平洋博物館国際シンポジウム」を据えたのです。

その2つの特別事業は、中川館長が主導する通常の仕事と同様、高い目標を掲げ妥協しない内容です。それに応える職員側の苦労も大変でしたが、中川館長の熱意に応え、2つの事業は成功裏に幕を閉じました。

しかし、これで終わりではありません。中川館長はその先の10年を見据え、もう一つの柱である「自然博物館進化基本計画」も主導したのです。まさに自然博物館の基本理念「過去に学び、現在を知り、未来を測る」を実践するものでした。この計画は当初名称がなかなか決まらず、最後は中川館長自身が名付けました。

私にとって中川館長は、その年齢を超えてどこまで進化していくのか興味が尽きない大きな存在でした。

突然の訃報は誠に残念であり、御冥福を心からお祈り申し上げます。併せて心からお礼申し上げます。



環太平洋博物館国際シンポジウム

(2004.11.14)

## 出会いと別れ

中川志郎先生との最初の出会いは、1972年の秋でした。当時の私の上司が動物園長と親しく、一緒に来なさいということで、園を訪れました。園長が当時の中川飼育課長を園長室に呼び、紹介をいただきました。動物園に興味があるかと尋ねられ、突然のことで困惑し、曖昧な返事をしたのを覚えています。中川課

長からは動物園への希望があれば時間があるとき遊びに来なさいと言われていましたが、時間もなく、その後一度も動物園を訪れることはありませんでした。後で知ったのですが、当時獣医師の増員計画があり、園長と中川課長との面接試験に上司が自分を連れ出した、というのが真相のようです。時が移り、その後の御縁

## コラム by director SUGAYA

で、上野動物園長、東京動物園協合理事長、茨城県自然博物館長、日本動物愛護協会理事長と中川先生の後を追うとは思いませんでした。

病床で握手をしてお別れしたのが、意識のある先生との最後となりました。心より御冥福をお祈り申し上げます。

第56回  
企画展

“**鉱**”

-レアメタル，レアアース，新資源を探せ-

Mineral Resources -from the underground to urban mine-

人類は、銅や鉄、金などの有用金属<sup>ゆうようきんぞく</sup>に気づき、やがて鉱石からこれらを取り出す術<sup>すべ</sup>を見出し、利用してきました。その利用の幅は近代の工業技術の発展とともに著しく増大し、今ではほぼすべての金属が社会のあらゆる<sup>かつやく</sup>ところで活躍しています。

このような有用金属を大量に含む鉱石は、国内外のさまざまな鉱山で地下資源として採掘されています。近年、これらの地下資源が、地下で活動する灼熱のマグマや、深海底の熱水噴出孔<sup>ねつすいふんしゅつこう</sup>など、地球のさまざまな営みによってつくり出されたものであることがわかってきました。ここでは、鉄、銅、鉛、亜鉛<sup>せま</sup>や金などの鉱石はどのようなものか、その生い立ちに迫ります。

ところで最近、レアメタルやレアアースという語がテレビや新聞などによく登場します。これらは従来の金属にはない特性をもつ47種類の金属の総称で、現代社会を支える存在となっています。そこで、私たちの生活や最先端技術など、幅広い分野で活用されてい

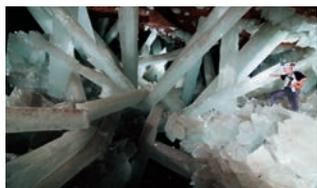


金鉱石の採掘作業(鹿児島県菱刈鉱山)

(提供:住友金属鉱山(株))

るレアメタルやレアアースを、その特性とともに紹介します。

近年、地下資源は限りあるものとして、新たな資源開発が進められています。そのような中、私たちの身のまわりに蓄積<sup>ちくせき</sup>されている膨大な<sup>ぼうだい</sup>“地上資源”が注目されています。この金属資源の現状とともに、未来像についても考えていきます。(資料課 小池 渉)

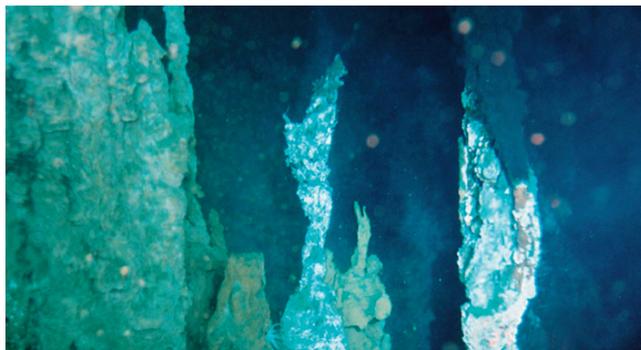


石膏の結晶洞窟

©Garcia-Ruiz



北海道で採取された砂金



深海底の熱水噴出孔に生じたチムニー

(提供:(独)海洋研究開発機構)



多くのレアメタルが使われているハイブリット車(カットモデル)(所蔵:本田技研工業(株))



イットリウム(レアアースのひとつ)



海洋底からみつかったレアアース泥  
(提供:加藤泰浩)

展示構成

- 結晶洞窟の世界へ
- 地球が産み出す資源-金属と利用-
- 海の底のめぐみ
- 地の底のめぐみ-金-
- 地球のめぐみ・鉱物資源
- レアメタル・レアアースの時代へ
- 今、時代は地上資源へ-都市鉱山は未来を担う新資源-

会 期 2012年10月6日(土)~2013年1月14日(月)

開館時間 9:30~17:00 (入館は16:30まで)

休 館 日 毎週月曜日

※10月8日(月),12月24日(月),1月14日(月)は開館し、翌日が休館。

※年末年始(12月28日~1月1日)は休館。

記念イベント

●記念観察会「鉱山跡で砂金をさがそう」(要参加費)

日時:10月28日(日)10:00~14:30

場所:太子町(現地集合)

対象:小学4年生以上 定員:30名(抽選)

●記念観察会「鉱山跡でレアメタルをさがそう」(要参加費)

日時:11月11日(日)10:00~14:30

場所:城里町(現地集合)

対象:小学4年生以上 定員:30名(抽選)

●記念講座

「深海底にある鉱物資源 -どんなもの?どうしてできたの?」

日時:1月13日(日)13:00~15:00

場所:博物館内

講師:西村 昭氏(産業技術総合研究所招聘研究員)

対象:中学生以上 定員:40名(先着順)

## 楽しいよ ボランティア主催のイベント

## 博物館ボランティア 2

当館のイベントガイドには、ミュージアムボランティア（以下、MV）が主催するイベントがいくつか掲載されています。今回は、その中から特に人気のイベントを2つ紹介します。

1つ目のイベントは、「とびだせ！子ども自然教室」（以下、子ども教室）です。1か月に1回程度行われているこのイベントは、当館の野外施設などで遊びをとおしてさまざまな自然にふれ、その不思議さを楽しみながら学ぶというものです。

子ども教室は12あるMVの各チームが持ち回りで年間1回ずつ担当します。そして、チーム毎にそれぞれの個性や持ち味を發揮しながら計画を立てて運営します。また、子ども教室は参加対象を小・中学生のみとしており、子どもたちはしばし親を離れてイベントに参加することで自立心が培われたり、子ども同士またはMVとの交流を深めたりしながら体験活動ができることも、このイベントの特徴です。

例えば、今年の7月21日に行われた子ども教室「トンボ博士になろう！」は、昆虫チームが担当で運営しました。このイベントでは、前半に子どもたち自身が当館野外施設でトンボを観察・採集し、後半にトンボの種類を見分けるポイントや標本の製作方法をMVか

ら学ぶトンボの学習会を行いました。楽しみながら知識も増やした新たな「トンボ博士」たちはみんな満足げな表情をしており、MVの支えにより子どもたちが成長することができたイベントとなりました。

2つ目に紹介するイベントは、「ふれあい野外ガイド」です。これは、毎月第3土曜日の13:30から14:30におもに本館の野外出入り口付近で行われるイベントで、MVが、博物館野外の自然についての解説や、日頃の活動の成果を紹介しています。このイベントもMVが各チームに分かれて活動しています。例えば、図書チームは小さな子どもを対象に紙芝居を行ったり、きのこチームは野外で採集したキノコを紹介したり、化石クリーニングチームは化石クイズを行ったりしながら、来館者とのふれあいを楽しんでいます。このイベントはいつも和やかな雰囲気なかで行われ、特に家族連れには人気があります。

このようにMVは、来館者と博物館をつなぐ重要なパートナーとして、今後ますます、その活躍の場が増えることでしょう。皆さんも当館にお越しただいて、MVと交流してみたいはいかがでしょうか。

（教育課 小泉直孝）



とびだせ！子ども自然教室「トンボ博士になろう！」のようす



ふれあい野外ガイドのようす

### ヒスイの話

当館の第2展示室にはミャンマー産のヒスイと、新潟県糸魚川市産のヒスイの原石があります。古くから親しまれてきたヒスイですが、70年程前まで日本国内では産出しないものと考えられていました。遺跡などからみつかるものはヒスイの産地として有名なミャンマーなどからやってきたものと考えられていました。ところが、1938年に新潟県糸魚川市でヒスイが発見されたのです。この発見は、詩人の相馬御風が

万葉集の中に新潟県と思われる場所で「青春のような美しい青色をした石があった」と詠まれていることを知り、これは新潟がヒスイの産地ではないかと推測していたことがきっかけになったようです。

さらに、作家の松本清張が『万葉翡翠』という推理小説を書いたことで、一躍その存在が世に知られることになりました。ヒスイの故郷にまつわる物語を感じながら、第2展示室でミャンマーと新潟から来た2つ

### 小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

の美しい石に思いを馳せてみてはいかがでしょう。

（展示解説員 池上侑花）



第2展示室にある2つのヒスイ

## コケの「子育て」は不思議がいっぱい!

研究ノート

博物館の野外施設の片隅で、しゃがみ込んでいる人がいたとします。それは、コンタクトレンズを落とした人かもしれませんし、からだの具合が悪い人かもしれません。少し心配ですね。しかし、まったく心配をしなくてよいケースもあります。それは、しゃがみ込んでいるのがコケの研究者である場合です。

コケはとても小さいため、地面に生えているコケを観察するためには、思いきって這いつくばるしかありません。地面すれすれに頭を下げて横から覗き込んでみると、コケからつんつんと何かとびだしているものに気付くことがあります。これは「孢子体」といい、細い柄の先に丸い孢子のうが付いたもので、孢子のうのなかには、コケが子孫を増やすために必要な「孢子」がたくさん詰まっています。(写真)

私たちが普段目にするコケの体は、「配偶体」とよばれます。コケの孢子体は、この配偶体の上でしか育つことができません。受精してすぐの小さな孢子体は、はじめ、配偶体の保護組織にすっぽりと包まれ、まるでお母さんのお腹の中にあるような状態で育ちます(右図)。やがてこの保護組織は孢子体の成長によ



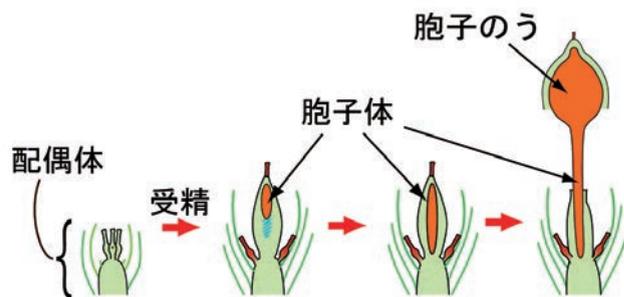
コツリガネゴケの孢子体 (高さは約2cm)

て破れ、孢子体の上部は外に飛び出すのですが、成熟して孢子散布ができるようになるまでずっと、その下端はしっかりと親元の配偶体と繋がっています。

このように、孢子体が一生涯を通じて配偶体から独立しないのは、他の陸上植物にはみられない、コケだけがもつ特徴です。この孢子体と配偶体が繋がっている部分は植物の進化を考える上でも興味深いところなのですが、この部分がどのようにできていくのか、その詳しい発生過程はほとんど明らかにされていませんでした。

そこで、数種類のスギゴケのなかま(蘚類)を、野外で定期的に採集し、組織切片をつくって受精から孢子散布までを詳しく観察しました。すると、どの種も配偶体の細胞を壊しながら、孢子体はずぶずぶと配偶体の中に貫入していることが明らかになりました。快適なスペースをつくるために、コケの赤ちゃんである孢子体はかなりの荒業を行っていたのです。現在では、ゼニゴケのなかま(苔類)でも観察を行っていますが、こちらは少し違う現象がみられています。

まだまだ謎がいっぱいのコケの子育て。皆さんも、道ばたでコケをみつけたとき、その小さな世界で行われている不思議な子育てに思いをはせてみてはいかがでしょうか。(資料課 鵜沢美穂子)



スギゴケのなかま(蘚類)の孢子体発生

### あなたはメダカを知っていますか?

私たちにとってメダカは歌や学校の授業などでもとりあげられるほど、身近な淡水魚です。しかし、皆さんは野生のメダカをみたことはあるでしょうか。

当館の第3展示室にある円柱水槽には、野生メダカを展示しています。そのメダカは、私たちが博物館近くの水路や小川で網とバケツを使い採取してきたものです。

メダカは、あまり整備されていない水路や水草がある所など、限られ

た場所にしか生息していないので、実はみつけることが大変です。さらに近年では、農薬の使用や生活排水によりメダカにとっての生息環境が悪化しており、昔のようにみる事ができなくなっているのです。

私たちは、そんな貴重なメダカを長期飼育することを目標にしています。当館で大切に飼育されているメダカを、ぜひ注目してみてくださいね。(水系担当:武藤 唯)

### おさかな通信



メダカ

## トピックス

### ○中学生・高校生が職場体験を行いました！

7月24～25日、8月1～3日に、県内8校24名の中学生・高校生が当館において職場体験を行いました。

まず導入として、栗栖教育課長による「博物館の仕事」という講話が行われました。博物館職員の仕事や、博物館の意義について、生徒たちは熱心に聞いていました。それから実際に館職員の仕事を経験しました。展示解説員とお客様への対応を行ったり、水系職員と人工海水をつくったり、野外担当職員と除草作業を行ったりしました。いろいろな仕事を体験し、生徒たちからは「博物館ってこんな仕事もあるんだ…」という感想が聞かれました。

また、いろいろな標本の整理や製作の仕事も体験しました。博物館の標本が何のためにあり、どのように製作・保管されているのか、実際の標本に触れて学習しました。さらに、学習教材を作成する仕事も体験し、教える立場になって頭をひねっていました。職場体験を通して、生徒たちは博物館の仕事について理解を深めることができましたようです。（教育課 加藤太一）



動物標本製作の補助活動を行う生徒

### ○企画展記念イベント「貝の動物園をつくろう」

第55回企画展「不思議いっぱい！貝たちの世界－蝸牛から烏賊・蛸まで－」はご覧になりましたか。この企画展で人気のあった展示のひとつが「貝殻アートの部屋」です。このコーナーでは、海辺で拾った貝殻を組み合わせて制作したいろいろな動物を展示しました。8月4日に行われた企画展記念イベント「貝の動物園をつくろう」では、これらの作品の制作者の一人である角田 元先生（かいのどうぶつえん園長）を講師としてお招きし、貝殻でいろいろな動物をつくりました。参加者は接着剤で貝殻をつなぎ合わせながら、自分の好きな動物をつくっていきます。完成したものをみると簡単につくれそうですが、実際やってみると細かい作業の連続で、予想以上に時間がかかりましたが、参加者は自分だけのオリジナルの貝の動物づくりを楽しんでいました。完成した作品は、企画展の中で「みんなでつくった貝の動物園」として追加で展示さ

れました。貝殻アートは海辺で貝殻さえ集めれば、誰でも気軽に楽しめます。ぜひ皆さんも挑戦してみてくださいいかがでしょうか。（資料課 池澤広美）



みんなでつくった貝の動物園

### ○視覚障害のある子どもたちの体験活動

視覚障害のある子どもたちに対して科学の面白さを知る体験を提供する「科学へジャンプ」事業（平成21～23年度科学技術振興機構支援事業）のサマーキャンプの一環として、全国から集まった16名の視覚障害がある中学生・高校生が8月23日に当館を訪れ、化石や動物の剥製の観察などの体験活動を行いました。

ワークショップのひとつ「化石のレプリカをつくらう」では、感覚を研ぎ澄ませながら三葉虫化石をよく触察してそのからだの特徴を調べました。「からだには節のような凹凸がある」「片端には突起状の眼のようなものが2つある」などの言葉が、参加者の中・高生から聞かれました。そして、節足動物である三葉虫がダンゴムシのように丸まったり、複眼で周囲をよくみながら外敵から身を守っていたりしていたことなどを学んでいました。その後、苦労しながらも自分たちで型に石膏を流し込み、化石のレプリカを完成させました。

ワークショップのあとはグループ毎に分かれて館内を見学しました。隕石やアンモナイトなどの実物標本に直接さわって、当館のハンズオン展示を満喫していました。（教育課 赤羽岳彦）



「化石のレプリカをつくらう」のようす

## 稲刈り楽しみ!～坂東市立七郷小学校との稲作活動～



田植えのようす

博物館の田んぼでは、毎年七郷小学校の5年生が総合的な学習の時間「米づくりの名人になろう」の中で年に3回博物館に足を運び、田植え、草刈り、稲刈りの活動を行っています。

今年の田植えは、晴天のもと、5月17日(木)に行われました。5年生児童48名が、ミュージアムボランティア13名に教わりながら、田植えを行いました。博物館の田んぼは大人でも膝まで入るような深田です。子どもたちは最初はおっかなびっくりで恐る恐る田んぼに入っていました。それでも慣れてくると泥んこになりながらも黙々と田植えに取り組みました。田植えと同時に、ザリガニやドジョウ、カエルなどの観察も行いました。田んぼにいるさまざまな生き物とのふれあいから、自然の大切さも学んでくれたらうれしく思います。



田んぼの回りの生き物観察

約2か月後の7月5日(木)には、田んぼ周りの草刈りを行いました。もう大分蒸し暑くなった田んぼ周辺で、大きく成長した稲と、春とはまた違った田んぼのようすを観察しました。

稲刈りは9月下旬を予定しています。七郷小の子どもたちは今から稲刈りを楽しみにしています。

(教育課 小泉直孝)

### 編集後記

4年に一度のオリンピックも大盛況のうちにおわり、本格的な秋のイベントシーズンを控え、館では次期企画展の開催に向けて準備を進めています。そのなかで、現代における鉱物利用の一例として、オリンピックメダルの展示を考えました。現在、本県出身の金メダリストに対して交渉中で、了解が得られれば、第56回企画展の中で展示が実現します。映像の中ではおなじみのメダルですが、実物を観る機会は希少だと思います、どうぞお楽しみに!(j.t.)

### 【交通案内】



### 〈車ご利用の場合〉

- 常磐自動車道谷和原ICから20分  
〈鉄道・バスご利用の場合〉
  - つくばエクスプレス守谷駅下車  
～関東鉄道バス「岩井行き」乗車  
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
  - 東武野田線愛宕駅下車  
～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車  
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- ※事前に発車時刻等をご確認ください。



### 【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
一般	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注):( )内は団体料金(20名以上)  
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。  
次の日は入館料が無料です。  
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)  
●11月13日(茨城県民の日) ●3月20日(春分の日)  
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日  
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

### 【休館日】

- 毎週月曜日
- ※9月17日(月)、10月8日(月)、12月24日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※12月28日(金)～1月1日(火)は、休館となります。

